会長の時間　　●冨田会長

小澤征爾を悼む

２月 6 日、世界的なマエストロ小澤征爾氏が逝去されました。1935 年に満州に生まれた小澤征爾は、音楽で東洋人として最初の成功者となりました。

小澤征爾の追悼番組の中で、2023 年９月の松本でのサイトウキネンオーケストラの演奏は感動的でした。指揮は小澤との友情の為に来日した 92 歳のジョン・ウィリアムズが担当し、一方、小澤は演奏終了後、車椅子で登場し、満場の喝采を浴びながら、僅かな指の動きと溢れる涙だけが生きている証である様でした。

小澤の対談集は３冊あり、村上春樹や武満徹との対談と、もう一冊は、「同じ年に生まれて」という題で大江健三郎との対談を綴ったものでした。この著書は 2002 年の刊行で、大江も小澤も 65 歳の時のものですが、この頃から、小澤が、音楽遺産の継承を目的に若い人の育成をライフ・ワークとして認識し、その為に尽力されて来たことが伺えます。

小澤は 60 年代から国際舞台で活躍しましたが、カラヤンやバーンスタインの支持を受け、73 年にボストン交響楽団の音楽監督に就任し、爾来、ウィーンフィルやベルリンフィル等ヨーロッパでも活躍しました。

小澤の辿った道は、決して平坦では無く、人種差別や NHK との確執等がありましたが、多くの支持者を集めて、自らの人間力で克服し、「世界の小澤」と称賛されるに至りました。

小澤は、夢と義務と責任感をもって音楽に臨み、古典音楽を現代に蘇らせ、音楽を普遍的なものとして捉え、音楽の開放性や世界共通言語として横のつながりを深めるコミュニケーション力やインヴォルヴメント（席巻力）を信じ、民主主義や平等を唱えながらも自由な個性を尊重するスタンスを貫きました。そして、前述通り、若い人の育成を使命と考え、桐朋学園の恩師の斎藤秀雄を偲び、1984 年にサイトウキネンオーケストラを設立し、自由な個性を高めることを重視しながら後継者育成に尽くされました。

現代を代表するマエストロ佐渡裕もキッズオーケストラの育成や被災地に届ける演奏会の開催等、小澤の思想を引き継ぐ後継者の一人ですが、小澤が音楽活動を通じて過去と現在と未来を繋いだ功績は大きいと思います。

小澤は、様々な文化を結び付ける oneness という概念を使い、音楽を通じて世界がひとつに繋がり、世界平和を希求していた様ですが、まさに小澤の歩んだ人生は、平和、寛容、多様性、新世代の育成などのキーワードで綴られ、多くの点でロータリーの歩む道と重なるものがあり、小澤征爾の生涯を知ることは、音楽に限らずロータリアンにとっても大いに参考になるのではないかと思います。